市民を含め，学会員でない参加者も大勢見られた．大会では４つの分科会で合計16の個人研究報告がなされた．筆者は，第12回出生動向基本調査のデータを使い，「シングル女性のライフコースに対する考え方」と題する報告を行なった．女性学は学際的であり，研究者のみではなく，活動家や市民と共に築く「学問」であるため，分科会といっても，内容はまちまちになってしまうが，筆者と同じ分科会では，立命館大学・博士課程の山地久美子さんによる「家族型福祉国家の社会政策における家庭像―日本の女児選好・韓国の男児選考による社会学的分析」という報告があった．

本大会のメインである『ウーマンリブが拓いた地平』と題された大会シンポジウムでは，田中美津さんが『自縛のフェミニズムを抜け出して―立派になるより幸せになりたい―』というタイトルで基調講演を行い，その後，異なる世代の女性が，自分とリブとのかかわりを中心に語るパネルディスカッションを行なった．大学院生や専任の職につかない「弱い立場」にある者と，「定職」のある研究者・教員との力関係も問題のひとつとして取り上げられた．この様な問題を学会の場で正面から取り上げられることのできるのは，本学会ならではのことだろう．（釜野さおり記）

アメリカ人口学会2004年大会

アメリカ人口学会（Population Association of America）の2004年大会が４月１日～３日マサチューセッツ州ボストンにて開催された．米国のみならず世界各国から2000人近い参加者があり，例年通り盛況であった．セッション・テーマは出生・家族計画，家族形成と解消，健康・死亡，移動，世帯，高齢化，推計，方法論，歴史人口など多岐にわたり，必ずしも米国国内の問題に限らず，欧州やアジア，途上国との比較研究も盛んであった．日本でなじみ深い，低出生率や高齢化といったテーマ以外にも，国際人口移動，Intermarriage，HIV/AIDS，暴力，貧困，母子の健康といった問題に関する報告が数多く見受けられた．実証分析に関しては，大規模なパネルデータや国際比較調査に基づいた高度な分析結果が紹介されていたが，そこには各大学や人口研究に関わる各組織がデータの提供や整備に尽力してそうした研究活動を支え，研究者側もそのような取り組みを高く評価するとともに，着実な成果を産み出すという循環が機能しているように思われた．U.S. Census Bureau の研究員が Helping you make informed decisions という組織のキャッチコピーを紹介しながら高度かつ有用性が理解できる分析結果を報告しているのが印象的であった．先進諸国の出生力については，出生意欲そのものの低下が，完結出生児数を大幅に下げることになるとの見通しや，経済力と介護の両方を期待できる女児を選好する風潮が北欧諸国で強まっているといった現状が紹介された．死亡を中心とした数理人口学のセッションでは，Schoen，Bongaarts，Lee といった世界を代表する人口研究者が新たな議論の展開を予感させる大胆な報告を行い，熱気あふれる会場となった．寿命の将来予測についても一段と進歩する可能性が大いに期待できる．

本研究所からは金子隆一が“On Changing Factors of Marriage Transformation in Japan: Decomposition of Delay in Women's First Marriage Process”，岩澤が James Raymo 氏と共同で“Premarital Pregnancy and Spouse Paring Patterns in Japan”を報告した．日本はアジアの先進国かつ超低出生力，最高寿命の国として海外の研究者からも大きな関心を寄せられている．こうした活動の場で，情報提供および意見交換を行うことは国内外の人口研究にとって大変有意義と思われる．（岩澤美帆記）